

聖日集会 聖書講筵

神の奥義なるキリスト コロサイ書、テサロニケ書他

1995年5月21日

奥田昌道

- 1、永遠の生命をいただいて
- 2、神の奥義は汝らの中に在すキリスト
- 3、キリストは神の具象
- 4、霊なるキリストの中にバプテスマされる
- 5、キリストはわが牧者
- 6、囚われのない自由
- 7、我々の日常の姿
 - (1) 慈悲・仁慈・謙遜・柔和・寛容
 - (2) 愛は徳を全うする帯
 - (3) 平安と感謝
 - (4) キリストの心をもって受け入れる
- 8、神の計画に従う
- 9、信・愛・望
- 10、個々が主と共に生くる
- 11、霊なるキリストに立ち返れ

資料

●1、永遠の生命をいただいて

さきほど、森兄が「ともしび第24号」(巻末資料)でご紹介下さったように、今から7年前の1988年5月24日に小野逸次兄が召天されました。西山霊園のお墓の墓石を見ていただいたらよく分かりますが、非常に立派なもので、トップが小野兄なのです。その横には小野はつ姉のお名前があります。それから後、中田姉、広瀬姉、上田姉、衣川姉等のお名前が刻^{きざ}んであります。この讚美歌(489番 きよき岸辺に)を歌っていて本当に涙が出ますね。私たちはいつか必ず使命が終われば、この地上の体を脱ぎ捨てて、向こうに迎えられる。私たちは決して、滅びることはない。本当に小野はつ姉が今言われたように、「永遠の生命」をいただいています。小野姉がご主人にああしてあげたかった、こうしてあげたかったということをおっしゃいましたけれども、私たちの地上の生命というのは、一期一会^{いちごいちえ}といわれるように、今、お会いしていても本当に明日のことは分からない。ですから、皆さん、ご家族や自分と関わりのあるどなたに対しても、明日またということではなくて、自分に許されていること、できることを精いっぱいするという、それだと思えます。血肉の親子、兄弟、夫婦、また集会の兄姉であつても、この方とはもうこれでお会いしないかも分からない、という思いをいつも持つていることは大事なことです。

不思議と小野兄の語り口やお姿が非常に鮮明^{せんめい}に私の脳裏^{のうり}に甦^{よみがえ}っております。本当にふとそこにおられるような気がいたします。小野兄は一番出席率が高かったのではないでしうか。ここに来ることと、碁会所^{ごかいしよ}に行つて碁をして楽しむ生活をされていましたが、信仰



の面では、やはり一本筋金が入っておられました。テサロニケ前書第5章16〜20節の、

「常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ、御霊を消すな」

とそのことを折りに触れておっしゃっていました。没後、七周年になります。

小野兄が召天されたときに、私の叔母の上田姉妹が、

「あんなふうにはキリストがして下さるならば、何も心配することはない」

と申しました。やはり、叔母にとつても自分が倒れて長い間、他人のご厄介になるということをもものすごく苦にしている。それで、小野兄のことを見て、安心だと言いました。私はいつも、

「そうだよ、何も心配いらんのやから」

と言いつづけてきました。

●2、神の奥義は汝らの中に在すキリスト

今日は、コロサイ書の「神の奥義なるキリスト」を題材に引きました。昨今の偽宗教という事態を前にして、いろいろな論評を読みましても、どうしてもあんなものに引かれていくのだろうかというのが一つと、宗教界において、自分たちは自分たちの真の姿を人々の前に表してきたか、自分たち自身のやるべきことをしつかりやっていなかったのではないか、という反省の声が宗教界の方々の座談会にもうかがわれます。本当の姿が失われているから、そういうものが出てきてしまう。それから、本当のものを教えるというか、宗教に関する真の意味の知識を若い人たちに与えることをあまりにもしなかった。それをタブー視して教育の世界から全部奪い去っていた。そして、エアポケットができてしまった。そうすると変なものが出てきても正しい判断ができず、そこに飛びついてしまうことになるのではないかと、いろいろな声が聞かれる。それは名ある人が言っているだけではなくて、新聞の投書欄等に掲載されているものを読んでもそのようなことがうかがえます。その意味では、今、真なるものに目覚める一つのチャンスがきているとも言えます。私たちはそういう角度から、パウロの書簡等を読みますと、何とこれは素晴らしいということを改めて思わざるを得ない。そういうことから今日はコロサイ書第1章24節から読んでみます。

「われ今なんじらの為に受くる苦難を喜び、又キリストの体なる教会のために我が身をもてキリストの患難の欠けたるを補う。」

パウロは囚われの身ですから、神のため、福音のため、宣教のゆえに苦しみを受けている。

われ神より汝等のために与えられたる職に随いて教会の役者となれり。これ神の言、すなわち歴世歴代かくれて今神の聖徒に顕れたる奥義を宣伝えんと

てなり」(コロサイ書1・24〜26)

パウロは、教会に仕える役者、自分を捧げているのです。信者から収奪しているのではない。新共同訳聖書の方では何と訳しているでしょうか。



「今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。神は御言葉をあなた方に余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです」（コロサイの信徒への手紙1・24～26）

新共同訳では、「奥義」というのは「秘められたる計画」と言っている。

「この秘められた計画が異邦人にとつてどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなた方の内におられるキリスト、栄光の希望です。このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を論し、教えています。このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています」（コロサイの信徒への手紙1・27～29）

「秘められた計画」と、ここまで訳してしまつて、はたして良いのかという思いがしますが、聖徒に現された今までは神様の秘義とされてきたご計画と受けとつていきましよう。

「此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり」（コロサイ書1・27）

現代語だったら、

「その計画とはあなた方の中におられるキリスト、栄光の希望」

ということになります。「秘められた計画」とあるように、ご計画という面もあるでしょうが、原語は「ミステリオン」だそうです。

ですから、今までベールの中に包まれて隠されていた神の秘義、いまやつとその姿を現して下さったという意味の神秘とか秘義、こういうニュアンスを大事にしたいと思うのですね。それは何かというと、

「あなた方の中に在すキリストである」

と。キリストという神様のとおつておきの宝が、他ならぬ異邦人、全く無縁と思われていた私たちの中に、一人ひとりの中に宿り給うた、これが秘義だと。ミステリオン、奥義、究極の神様の御意です。そのように受けとつていただきたい。創世記によれば、

「人は神の似姿として創られた。神の息を吹き込まれて人は生きる者になった」

とあります。しかし、それは神様の創造の始まりであつて、完成はこの秘義なるキリスト、神様の一番究極の真の具現者であるキリスト、そのキリストが我々一人ひとりの中に宿り給うたと。

我々一人ひとりがキリストという宝をいただいて、それと一つに化せられる、これは秘



義だ。全地がキリストで満ちる。しかも、キリストの霊なる人格が一人ひとりに宿って、その人がきらきら輝いている姿、これが神の創造の完成です。

私はそんなふうに受けとりたい。そのときに、神の創造の業が本当の意味で終わるわけでしょうね。それが黙示録にあのような姿で描かれている。そんなふうにみますと、これは正に神の御業なのです。

「この奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり」

と。どこまでもキリスト中心です。修行して解脱して、といったそんなまやかしではない。キリストが輝き給う、一人ひとりの中にキリストの御像が成る。どこまでもキリスト、そのことが一番素晴らしいことです。

●3、キリストは神の具象

そのキリストとはどんな方かというと、第1章15節に、

「彼は見得べからざる神の像にして、万の造られし物の先に生まれ給える者なり。万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるいは支配、あるいは政治、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。彼は万の物より先にあり、

万の物は彼によりて保つことを得るなり」(コロサイ書1・15・17)

神様は見えない、しかし、キリストは神を我々に現して下さっている。創造主はお造りになった一つ一つのものに自分の生命を別ち与えて、それを保つて永遠に全うして下さる。これが本当に造り主の姿です。造りっぱなしで後は知らんと捨ててしまうようなお方ではない。造ったからには責任を持つて下さり、そして、全うする。

創造というのはご自分のいわばご性質を別ち与えて、それを展開していらつしやる姿です。そして、造られた者と造った者は本当に互いに愛しい、被造物は造り主をほめ讃える。造り主は造られた者に生命を与えて、それをどこまでも全うしていく。私は「創造」という愛の業は、そういうことだと思えます。

だから、

「みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり」

というのは、創造主であり給う方の喜びとしてということですね。

「而して彼はその体なる教会の首なり、彼は始にして死人の中より最先に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長とならん為なり。神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万の物をして己と和がしむるを善しと為給いたればなり。汝等もとは悪しき業を行いて神に遠ざかり、心にて其の敵となりしが、今は神キリストの肉の体をもて其の死により汝等をして己と和がしめ、



潔く暇なく責むべき所なくして、己の前に立しめんと為給うなり。汝等もし信仰に止まり、之に基きて堅く立ち福音の望より移らずば、斯く為らるることを得べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の下なる凡ての造られし物に宣伝えられたるものにして、我パウロはその役者となれり」(コロサイ書 1・18～23)

パウロはこういった手紙を通して、あなた方が神の前にかなる者とされているのか、あなたの方の本質というのはどんなに素晴らしいか、ということをお我々に知らしめてくれている。これから何かになるのではない。あなた方は本来こういう者としてすでに造られ、建てられ、贖われ、さらに素晴らしい姿へと化しつつあるのだということを知らせてくれます。だから、

「智慧を尽くして、凡ての人を訓戒し、凡ての人を教う」(コロサイ書1・38)と。やはり、自分の真の様を知ることによつて、変な誘惑とか、誘い、惑わしなどから自分を護ることができから、本当の英知、知というものが大事だということです。

「われ之がために我が衷に能力をもて働き給うものの活動にしたいが、力を尽くして労するなり」(コロサイ書1・29)

そして、いろいろな人にパウロは会いたいと言っている。

「斯く苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相列り、全き穎悟の凡ての富を得て、神の奥義なるキリストを知らん為なり」(コロサイ書2・2)

キリストこそ神のミステリオン、神様の神秘の具象であります。

「キリストには智慧と知識との凡ての宝蔵れあり。我これを言うは、巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん為なり」(コロサイ書2・3～4)

ということは巧なる言をもて欺く人がいっぱい出てきているからです。

「われ肉体にては汝らと離れ居れど、霊にては汝らと偕に居りて喜び、また汝らの秩序あるキリストに対する信仰の堅きとを見るなり。

汝らキリスト・イエスを主として受けたるにより、其のごとく彼に在りて歩め。また彼に根ざして、その上に建てられ、かつ教えられし如く信仰を堅くし、溢るるばかり感謝せよ。

なんじら心すべし、恐くはキリストに従わずして人の言伝と世の小学に従い、人を惑す虚しき哲学をもて汝らを奪い去る者あらん」(コロサイ書 2・5～8)

「世の小学」というのは、その当時の宇宙天体に関わる知識のことだったようですが、それはその時代のこと、大事なことは人の言い伝えとか、人間の作り話、あるいはちよつとした霊的体験とかそんなものを織り交ぜた言葉、知識でもって人を惑わし、キリストから離れさせようとする力が働くということです。人を惑わす虚しき哲学、これで汝らを奪



い去る者があるだろう。

それで、パウロが言わんとするのは、

「絶えず目をキリストに向けていなさい。キリストに目を注いでいなさい。キリストがすべてです」

と。それだけなのです。我々の向かうところはキリストというお方だけです。そして、そのお方の中に満ち満ちているものが私たちの中にも宿ると、私たちはついにキリストの御姿に化せられる、そういうところへと今導かれつつあります。

●4、霊なるキリストの中にバプテスマされる

私たちがお互いに人と人の間で行うべき姿は何かと言いますと、パウロによれば「愛」、愛に尽きるのです。それは次の第3章に出てきます。修行だとか、位を与えたり、ホーリネームを与えたり、それらは全部、人の欲望に迎合している姿です。

「最終解脱に達した。自分たちはこういう体験をしたから、そこらの人と違う」

とか言う、人は

「ああ、そうか、あの人はやっぱりそういう体験をしているのか」

とか、そう思うでしょう。しかし、

「そんなことではない、キリストがすべてだ」

とパウロは言ってくれているわけですね。

「キリストには知恵と知識との凡ての宝蔵あり。巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん為なり」

と。そういう惑わすものが出てくる。しかし、そんなものに惑わされてはだめだ。

「神の満ち足れる徳はことごとく形体をなしてキリストに宿れり。汝らは彼に在りて満ち足れるなり」(コロサイ書2・9～10)

キリストに満ち満ちているものは我々の中にも聖霊として、満ち満ちてくる。そういう充滿、これをどうぞ味わって下さい。

「彼は凡ての政治と権威との首なり。汝らまた彼に在りて手をもて為さる割礼を受けたり、即ち肉の体を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり」(コ

ロサイ書2・10～11)

外側ではない、

「心の中に割礼を受ける」

ということ、心が砕かれて、エゴイストだった者のエゴが十字架で洗い流されて、本当にキリストの御霊という新しい生命が宿ることです。

「汝らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中より甦らせ給いし神の活動を信ずるによりて、彼と共に甦らせられたり」(コ



サイ書2・12)

キリストの霊の中にバプテスマされて、古き我を脱ぎ捨ててキリストの中に甦るという気持ちです。

「汝ら前には諸般の咎と肉の割礼なきとに因りて死にたる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦し、かつ我らを責むる規の証書、すなわち我らに逆う証書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、政治と権威とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給えり」(コロサイ書2・13～15)

●5、キリストはわが牧者

次に18節、

「殊更に謙遜をよそおい、御使を拝する者に汝らの褒美を奪わるな」(コロサイ書2・18)

いわゆる神秘体験とか、何か霊を見たとか、そう言ったことで如何にも謙遜で宗教的に見えるようなものに惑わされないようにということですね。

「斯る者は見し所のものに基き、肉の念に随いて徒らに誇り、首〔キリスト〕に属くことを為ざるなり」(コロサイ書2・18～19)

「見し所のもの」、霊的にこんなものを見たとか、自分は霊視したとか、いわゆる宗教体験、そんなものは肉のものと。

「肉の念に随いて徒らに誇り、首に属くことを為ざるなり」

と、これはキリスト教から分派していった人たちのことだと思えます。

「本体はキリストなのだから、しっかりとキリストにつながれ、中に入れられていな

と。」

と。

「全体〔身体のすべて〕は、この首〔キリスト〕によりて節々維々に助けられ、相連なり、神の育にて成長するなり」(コロサイ書2・19)

神様が牧者であり給うて、私たちを全うして下さるので、こちらの側が何か修行したり、霊的体験をしてそれによって立派になるといった、そんなものではない。その次にも言っていますね。23節、

「人間が造ったいろいろな」誠命は、みずから定めたる礼拝と謙遜と身を惜まぬ事とによりて智恵あるごとく見ゆれど、実は肉欲の放縦を防ぐ力なし」(コロサイ書2・23)

ある宗教は適当に身を苦しめるような修行をさせるわけです。そしていかにも、段々自分が清められていくような錯覚に陥らせて、ある修行が済んだら、位が一つ上がるとかし



ていますが、それは自ら定めた礼拝でしょう。それから謙遜のように振る舞って身を惜しまず、全部捧げてしまつて、如何にも宗教的な立派なことをやっているように見えるけれども、実は何にもならない、肉欲のほしいままを防ぐ力はない。だから、ここでも、キリスト抜き知識だとか、修行だとか、経験とか、そんなものは如何に偽りに走り易いかということを言っています。パウロは別に今の時のことを見通して言っているわけではないのだけれども、あの時代にすでにこんなことが言われている。歴史は繰り返している、そう思っていたらいいと思いますね。では、第3章に行きます。

●6、囚われない自由

「汝等もしキリストと共に甦よみがえらせられしならば

汝すでにキリストと共に甦よみがええらせられし以上は、

上〔天〕にあるものを求めよ、キリスト彼処かしこ〔天界〕に在りて神の右に坐し給うなり。汝ら上にあるものを念おもひ、地に在るもの〔生まれながらの人間〕を念うな、汝らは死にたる者にして〔この世に死んだ〕其の生命いのちはキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん」（コロサイ書3：1〜4）

この、

「汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればな

り」

この言葉は下手へたをするといふ世のことには一切関わりを持たなくなつて、特別な集団を造つて特別な生活をするといふふうには誤解されやすい。けれども、そうではなく、我々はこの世の事柄に対しては本質的に解脱げだつしてしまっている。私たちはキリストの生命いのちを戴いたいて、この世に対して、主人公です。今まではこの世の奴隷どれいだったのです。いろいろな思い煩わづらい、霊力、人の言葉等、回りのことに振り回されて、私たちは実は自由ではなかった、奴隷だったのです。ところが、この世に対して、我々は一度死んだ。そして、キリストの霊の生命、神の生命に蘇よみがえった。この世に対して、超然ちやうぜんと自分たちこそ本当の主人公である。むしろ、この世を救い上げるように、私たちは力を尽くしますし、また、現実のいろいろな事柄に対して、主体的に対処していける、それが本当の自由です。私たちは自分の生き方をもつてそのことをはっきりと証言できます。

この世から逃げるのじゃない、逃げないでむしろ自分はその中で本当に主体的にしつかりとなすべき責任を果す。そして、この世には囚とらわれていないという本当の自由、それはこの世に対して一度死んでいなければ得られない。

「己おのれを惜おしみ、己の生命を愛する者はこれを失ひ、我がため福音のため、己を棄すてる者は、永遠とこしえの生命を得るなり」（マルコ伝8：35）



とキリストはおつしやいました。一度、そういう一切のものに対して自分が死んだとき、初めて一切のものを自分の支配下に収めることができる。この世での様々の仕事や課題も神様が託された仕事として、果していく。神様は、

「お前は私の導きの下に、あれに携わりなさい、これに携わりなさい。それは私が
お前に与えた仕事だから、責任は私が取るよ」

と言って下さる。

「お前じゃない。責任は私が取るから、私の思いをそこで成就しなさい」

と。そういう形で、一度、天に召されたものももう一遍、この世に遣わされて帰って来たという感じですね。その気持ちというのは、我々は絶えず持ち続ける必要があります。人間というのは弱いですから、いつしか、頭で分かっている、現実の自分の生活というのは、人が言った言葉が気になったりとか、いろいろなことが気になってきます。そういうときに、本当に机の上につ伏せになってもいいですし、畳の上につ伏せになってもいいし、姿はどうでもいい。本当に自分を投げ出して、

「主さま、私にとっては主さま、あなたご自身だけが究極のもの、あなただけが

私の生命でございました。今、囚われの中にある私を本来の姿に帰して下さい。

主さま、もう一度、本当に原点に帰らせて下さい。あなただけなのです。私はこの世には死んだ人間です。その意味ではこの世とは一線を画している人間です。

主さま、本当にあなたがすべてであるという原点をしつかりと貫かせて下さい」

と。私も時々祈りますよ。そうしたら、本当にすかっとします。さっきの小野姉のご証言で小野兄が召される時、うわつと叫ばれたというのは、キリストも天界に入るときは叫ばれて行かれた。何か、すかっとされたのではないでしょう。だから、我々は日々死んで行かないといけません。人の言葉や行為、人の自分に対する対し方とか、そんなのが非常に気になって、過度に敏感になりますときは、ちょっと危険信号だと思われたらいい。本来、本当にキリストの中に自分をどっぷり入れていたら、人が何を言ってもそれはよく蛙の面に水とか言いますね。そうである筈なのです。人のことが気になっているときは、キリストが希薄になっているときだと、そういう兆候が現れていると思われたらいい。だから、もう一度、本当にどっぷりとキリストの中に自分を投げ入れて、30分でも15分でもとにかく、自分で気が済むまで手を休めてキリストの中に祈りこまれたら良いですね。

次、第3章9節へいきましよう。

「互に虚言をいうな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎ、新しき人を着

たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ

新になりて知識に至るなり」(コロサイ書3・9〜10)

これも神、キリストの中に宿っている究極の知識、神秘といったものと通じる内容だと思います。



「斯^{かく}てギリシヤ人とユダヤ人、割^{かつ}礼^{れい}と無割^む礼^{れい}、あるいは夷狄^{えびす}、スクテヤ人・奴隸^{わかし}・自主^{わかし}の別^{わかち}ある事なし

そんな外側のことは関係ない、

それキリストは万^{よろず}の物なり、万^{よろず}のものの中にあり」(コロサイ書3・11)

キリストに満たされてみると、世の中の自然万物、その他いろいろなものの中にキリストの御力^{みちから}というか、そういうものが染^しみ通^とっているようなことを感じることもある。表面はどんなに動揺^{うご}しているようであっても、なおそれは神の御言^{みことば}により神の生命^{いのち}によって保たれているのだということをふと感じることがあるのです。それは理屈^{りくつ}ではなく、

「それキリストは万^{よろず}の物なり、万^{よろず}のものの中にあり」
だからです。

●7、我々の日常の姿

●(1) 慈悲・仁慈・謙遜・柔和・寛容

「この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈^な悲^さの心・仁慈^な・謙遜^{けん}・柔和^わ・寛容^{くわん}を着よ」(コロサイ書3・12)

私たち自身は聖ではないけれども、キリストが我々を聖として下さった。「聖徒^{せいと}」と言えますね。キリストがご自分^{おのれ}の聖を分与^{ぶんよ}して下さったゆえに、聖なる者とされたのです。キリストがご自分^{おのれ}の血潮^{ちしお}で洗い清めて下さったゆえに、我々は清くせられたる者である。すべてキリストから流れて来ているのであって、聖とせられたる者、愛せられたる者——だから慈悲^なの心・仁慈^な・謙遜^{けん}・柔和^わ・寛容^{くわん}はすべて非常に静かな姿でしよ、どたばたおたおたしていない、本当に泰然^{たいぜん}自若^{じじやく}たる姿です、そして奥^{おく}が深い——慈^な悲^さの心・仁慈^な・謙遜^{けん}・柔和^わ・寛容^{くわん}の人となる。どうぞ、皆さん、懐^{ふところ}の深い人になって下さい。

相撲^{すもう}取りでも奥^{おく}が深い関取^{せきとり}がいるようですね。本当の横綱^{よこな}というのはどんなにぶつかっていても、ぶつかった力が全部すつと吸い込まれてしまって、向こうはびくともしないという。どんなにぶつかっていても力が吸収^{きゅうしゆ}されてしまう。そして、ちつとも後ろに下がらない、そして、良いようにあしらわれてしまうという話があります。我々は何か信仰でのごちごちで、宗教臭^{しやくしう}いにおいがプンプンという姿ではなく、ごく自然体^{しぜんたい}であつて、しかし、その中身^{なみだ}は慈悲^なの心、仁慈^な・謙遜^{けん}・柔和^わ・寛容^{くわん}というものがおのずとその人の第二^{だいに}の性^{さが}として形作^{かたち}られているという。それは正に神キリストの御霊^{みたま}の働きである。そういう姿がやはり、神の望み^{のぞ}み給^{たま}う姿であるということですね。

●(2) 愛は徳を全^{けん}つする帯

「また互^{たがい}に忍^{しの}びあい、若^もし人に責^せむべき事あらば互^{たがい}に恕^{ゆる}せ、主の汝^{なん}らを恕^{ゆる}し



給える如く汝らも然すべし。凡て此等のものの上に愛を加えよ」(コロサイ書 3・13～14)

先程の慈悲の心とか、仁慈、謙遜、柔和、寛容、これは非常に静かな姿だと言いました。山奥の中の深い湖のような静かな姿で奥行きが深く、懐が深く、泰然自若たる姿、それに対して「愛」というのは非常に活動的だということです。ここで言っているパウロの愛は、「愛の業」なのです。だから、静と動という、愛を動的なものとして、パウロは言っているというのに、私はまた非常に驚きました。そうでないと、この愛もさっきのものと並ぶ程度のものであったら、こんなところで

「汝らに愛を加えよ」

と言いませんよ。やはり、「愛を加えよ」ということは、愛は人のためにどんどん働くもの、担うもの、非常にポジティブ(英 positive)な、積極的なもの、そういうことがパウロの言いたいことではないでしょうか。

「愛は徳を全うする帯なり」(コロサイ書3・14)

愛はじつとしていられない、働かないではいられない、そういう躍動的なもの、それが生命というものです。躍動しているときに生命が実感される。働きの姿はいろいろで、本当に地味な姿もあれば、派手な姿もあるかも知れない。とにかくキリストの心をもつて働いている姿、それが愛だと受けとりたいたいと思っています。

「此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり」

と、さっきの慈悲の心、云々の徳、そういったものを完成するのは愛です。

●(3) 平安と感謝

「キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるは、これが為なり、汝ら感謝の心を抱け」(コロサイ書3・15)

いつも感謝していなさい。キリストの平安をいつも宿していなさい。どんなときでも平安があつて、どんなときでもおたおたしないというさっきの泰然自若たるさまで。キリスト者がいらだつていたら、ちよつとキリスト者らしくない。人間は感情的な面がありますから、一時的にはそんなことがあるとしても、本当に本来の姿はいつも平安があります。

「キリストは嵐の湖の中でも舟板を枕にすやすやとお休みになっていた」

という(マタイ伝8・23～27)。平安の姿がそこに現れています。外は波風が立っていても、キリストの中は実に平安です。それもどこから来るかと言えば、キリストを念じるところから出て来ます。自分で「俺は英雄だぞ、俺は揺がないぞ」と何遍唱えてもだめですね。すべてはキリストですよ。主イエス・キリスト様です。ですから、私の聖奮の読み方なのですが、



「キリストの平和をして汝らの心を掌^{つかさ}どらしめよ」
と出て来たら、

「ああ、主さま、そうですよ。主さま、これですよ、主さま！」
と言って、この言葉をきつかけとして、主さまと対話するわけです。

「主さま、どうぞ、あなたの平安の中に居らしめて下さい。あなたは、

「我、平安を汝に与う」

と言って下さいましたよね。

「我、汝に平安を与う。この平安を奪う者無し」

とおっしゃって下さいました。主さま、お約束ですよ。主さま、あなたが我が中^{うち}に宿り給うたら、平安そのものです。あなたが希薄^{きはく}になつておれば、どうしても、「俺^{おれ}が、俺^{おれ}が」という思いが出てきます。そうすると、平安が失せます。あなたが我が中にどつしりと座つていて下されば、私は平安ならざるを得ません。主さま、あなたです。主さま、あなたです。」
と、心の中でキリストに語りかけ、告白しておれば平安になります。

「汝らの召^{こゝろ}されて一体となりたるは、これが為^{ため}なり、汝ら感謝の心を抱^{いだ}け。キリストの言^{ことば}をして豊かに汝らの衷^{うち}に住ましめ、凡ての智恵によりて、詩〔詩篇〕と讚美と霊の歌とをもて、互に訓戒^{くんかい}し、互に教え、恩恵^{めぐみ}に感じて心のうちに神を讚美せよ。また為^なす所の凡ての事あるいは言^{ことば}あるいは行^{おこない}為^なみな主イエスの名に頼^よりて為^なし、彼によりて父なる神に感謝せよ」(コロサイ書3・15～17)

●(4) キリストの心をもって受け入れる

あとは夫と妻、親と子供、勤め、上司と自分という関係等が出て来ますけれども、その根底を流れているのは、両親^{両親}とか、上司とかそういう上下の間においては

「キリストに仕える^{こと}くに、キリストに仕える心でもって、接しなさい」

ということですよ。夫と妻ならば、

「お互いに受け入れ合う」

ということですね。また、上に立つ者は親ならば子供に対して、上司ならば下の者に対して、

「キリストの心をもつてそれを受け入れろ」

ということが言われています。

●8、神の計画に従う

そして、第4章にいきますと、

「汝ら感謝しつつ目を覚^さまして祈を常にせよ」(コロサイ書4・2)

このように見ますと、コロサイ書を通して、パウロがコロサイの人たちに語りかけてい



ることは、前半は我々がキリストにあつていかなる者とされているか、我々の存在の尊さ、キリストゆえに我々は如何に尊い存在とされているかということを見させ、そして、後半は我々の日常の姿としては今読みました12節から17節が基本です。むづかしいことを何かせよとか、メガホンを持つてあちこち走り回つて叫んでこいだとか、そんなことは何も言つてない。あなたがあなたの地上に置かれた分を全うするならばそれで神様はもう、ちゃんとご自分の御計画をなさつて下さいます。「三色すみれ」（巻末資料）というお話は非常に素晴らしいお話でしたね。すみれはすみれとして、他と比較するなと言うことでした。松の木、桃の木、いろいろな物がある。それぞれに特色がある。他の物を見て、自分にはそれが欠けているとか、自分もそんなふうになりたいとか、よそばかり見るな。三色すみれは、

「あなたは私が欲しいから、私をお植えになつたのです。だから、私は精いっぱい、最上の三色すみれになる決意しております」

と言つたというお話は本当に素晴らしいお話でした。クリスチャンも、「何かまだ足りないのではないか、まだ足りないのではないか」といつて、自分の思いで仕事をする。福音宣教だ何だといつてあちこち走り回つたりする。そういうことを何も主は求めておられない。それは、一人ひとりにちゃんとすべきことは示される。そのときに中なる声に従えば良いのです。それを何か画一的に「こうしなければいけない」とか、あつちの方向を向いて「わつしよい、わつしよい」とやつてみたり、こつちの方向を向いて同じように言つたりとか、そんなことはパウロの手紙を読む限りは何も求められていない。

●9、信・愛・望

次のテサロニケ書では、

「あなたがしつかりと信仰に立つていてくれること、あなた方の存在そのものが私の誇りであり、喜びである」

と言つています。

「われら祈のときに、汝らを覚えて、常に汝ら衆人のために神に感謝す。これ汝らが信仰のはたらき、愛の労苦、主イエス・キリストに対する望の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念うに因りてなり」（テサロニケ前書1・2・3）

みなさん一人ひとりが置かれた場で、日常生活で、一生懸命に主さまの証をなしておられる姿、愛のゆえに骨身をけずつておられる姿、それらはどうして可能なのかというところ、キリストに対する望があるからです。キリストが来り給う時をずっと待つてゐる。その時を満（まん）して待つてゐる。そういう忍耐を思うとき、私は本当に感謝しているとパウロは言つています。

「信仰のはたらき、愛の労苦、主イエス・キリストに対する望の忍耐」



この三つの言葉はどれもこれも非常に地味なもので、パツと華やかなものではないので、それから、

「我らの主イエスの来り給うとき、御前における我らの希望、また喜悅、また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。実に汝らは我らの光榮、我らの喜悅なり」(テ

サロニケ前2・19～20)

「兄弟よ、われらは、諸般の苦難と艱難との中にも汝らの信仰によりて慰安を得たり。汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり」(テサロニケ前3・7～8)

パウロは囚われの身であるという苦難の中にいるのですが、そういうパウロの愛の労苦、望みの忍耐、信仰の働きはパウロの姿そのものです。そういうパウロにとって何が喜びであり、何が支えであるかという、あなた方が堅く立つてくれていることだと言っている。勿論、キリストがパツと姿を現されて、

「大丈夫だよ、私がついているよ」

とおっしゃって下されば、それはもう、力強い励ましですけれども、それはめったにない。本当にめったにないのです。パウロの長い伝道生涯の中でも本当に数えるぐらいしかありません。けれども、パウロが伝道したテサロニケの兄弟たちは自分の生命も惜しまないぐらい、パウロのことを思っていた。そして、今もなお、信仰の場に堅く止まって、活き活きと生きていく、それがパウロの支えでありました。

「汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。汝等につきて我らの神の前によるこぶ大なる喜悅のために如何なる感謝をか神に献ぐべき。我らは夜昼祈りて、汝らの顔を見んことと、汝らの信仰の足らぬ所を補わんこととを切に願う」(テサロニケ前書3・9～10)

そして、第4章にいきますと、パウロがテサロニケの人たちに勧めていることも特に変わったことはありません。性的な清潔さを求め、地道に働くことを求めています。

「我らが前に命ぜしごとく力めて安静にし、己の業をなし、手づから働け。これ外の人に対して正しく行い、また自ら乏しきことなからん為なり」(テサロニケ前書4・11～12)

それから、その後は終わりの時の希望を言っているわけですね。先に眠りについた者も決して眠り続けるわけではない。天使のラッパの声と共に、復活、主に迎えられる。我々も主の御姿に化せられるという再臨の希望、復活の希望ということを第4章の後ろの方で言っています。

●10、個々が主と共に生くる

そして、今の我々の日常生活の姿として、



「それ汝等はみな光の子ども昼の子供なり。我らは夜に属く者にあらず、暗に属く者にあらず。されば他の人のごとく眠るべからず、

靈魂が眠らないように、

目を覚して慎むべし。眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔うなり。されど我らは昼に属く者なれば、信仰と愛との胸当てを着け、救の望の兜をかむりて慎むべし。それ神は我らを怒に遭せんとあらず、主イエス・キリストに頼りて救を得せんと定め給えるなり。主の我等のために死に給えるは、我等をして覚めおるとも眠りおるとも己と共に生くることを得しめん為なり」(テサロニケ前書5・5〜10)

我々が主さまと一緒に生きていることが、神の御旨である。

「此の故に互いに勧めて各自の徳を建つべし、これ汝らが常に為す所なり。：氣落せし者を励し、弱き者を扶け、凡ての人に対して寛容なれ。誰も人に対し悪をもて惡に報いぬよう慎め。ただ相互いに、また凡ての人に対して常に善を追い求めよ。常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。御霊を消すな、預言を蔑すな。……

願くは平和の神、みずから汝らを全く潔くし、汝らの霊と心と体とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの来り給うとき責むべき所なからしめ給わん事を。汝らを召したもう者は真実なれば、之を成し給うべし」(テサロニケ前書5・11〜24)

御国の完成は、今ここにパウロによつて勧められているように、一人ひとりの個がキリストの御姿に化せられていくという個の完成なくして御国の完成はないのです。

ややもすると、個というものはどうでも良い、こんな社会ができ上がったら良いのだ、人類最初の救済があれば良いのだ。理想社会を造るために今の者たちはほとんど犠牲にしても良いという、そういうのが非常に多いですね。そうではなくて、このパウロに示されたキリストの福音は、本当に個が個として完成されるということが計画の中にちゃんと入っているということです。我々、日本人というのはどちらかと言えば、昔から御国のために自分をも捨ててかかる、省みないということを戦時中も言われましたし、どうしても、集団主義的に、集団なら集団、企業なら企業、何かそういうものに自分を捧げ尽くして、自分などどうでも良いという、へたをするとそうなります。その裏は国だとか、社会はどうでも良い、好き勝手をやるという変な履き違えの個人主義、どちらかに分解してしまう。けれども、この福音こそは本当に個の完成と神の国の完成が一つになっています。キリストが来て下さったのは、一人ひとりを本当に神の作品として、全うして下さることにあります。私はそこに、個人の尊厳ということの本当の意義があると思います。それをこの間



も鈴鹿国際大学の講義で言いたかった。

それは私は日本に流れて来た思想の中からは生まれて来ないように思います。日本は神道とか儒教とかいろいろな思想の流れがあります。けれども、本当に個というものを神の作品として、しかもそれは単に昔、土から造られて神の息を吹き込まれたというところに止まらないで、キリストの贖いを通して、もう一度新しくせられた。本当の意味の完成がキリストによってなされた。そういう深い意義を内包する神の作品として我々を自覚させるものはキリストの福音をおいて他にないと思います。そうはいっても、この世は矛盾だらけですから、一筋縄で解けるようなものは一つもない。そのことをたとえば、ヨブ記が言っています。

この世の現実というのは非常に奥が深い。それを聖書は全部知った上で、

「個の完成がキリストの祈りだ。キリストはそのため十字架に懸かって死んで下さった」

と言っています。ということは担って下さっていることです。キリストは本当に地球全体を御自分のか細い体で担っていらっしゃる。そのすごい愛の力、これによって私たちは本当の意味で生きる者になれたのです。

コリント前書第15章の復活のところもそうです。

「肉なる者でまかれて霊なる者に甦らされる。終わりのアダムは生ける霊となれり」

と、ずっと貫かれているのです。福音書であろうと、書簡であろうとすべてそういうところに集約されていくように思います。決して、枝葉のことに囚われないで本当の核をつかんで下さい。核をつかめば、バプテスマはどうであったとか、洗礼はどうだとか、聖餐式はどうだとか、安息日はどうだとか、そのような枝葉のことは二の次のことなのです。

「本体はキリストなり」

とパウロは言ってくれています。キリストにしっかりと組み込まれてキリストの生命がさつと流れて来る。それが

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。我を離るれば汝は決して実を結ぶこと能わず」

(ヨハネ伝15・5)

です。単純と言えば単純なのです。真理はある意味では非常に単純です。現れ方は非常に複雑に現れているかも知れませんが、本当に極まるところは単純なのです。そういうものの素晴らしさということを私たちが自分の生活で現して、パウロが願っていてくれているような一人ひとりの姿であるならば、それを人は、やはり「あそこに本物があるのだ」ということに気づいてくれるだろう。御言と我々の生活とそれから歴史上のいろいろな証と、そういうことをもつてしか、目に見えない世界のことを証することはできないと思います。



●11、霊なるキリストに立ち返れ

それから、もう一つ偽宗教を見分ける大事なことはテサロニケ後書に現れています。新共同訳聖書で見えていきます。

「兄弟たち、あなたがたのことをいつも神に感謝せずにはられません。また、そうするのが当然です。あなたがたの信仰が大いに成長し、お互いに対する一人ひとりの愛が、あなたがたすべての間で豊かになっているからです。それで、わたしたち自身、あなたがたが今、受けているありとあらゆる迫害と苦難の中で、忍耐と信仰を示していることを、神の諸教会の間で誇りに思っています。これは、あなたがたを神の国にふさわしい者とする、神の判定が正しいという証拠です。あなたがたも、神の国のために苦しみを受けているのです。神は正しいことを行われます。あなたがたを苦しめている者には、苦しみをもって報い、また、苦しみを受けているあなたがたには、わたしたちと共に休息をもって報いてくださるのです。主イエスが力強い天使たちを率いて天から来られるとき、神はこの報いを実現なさいます。主イエスは、燃え盛る火の中を来られます。そして神を認めない者や、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者に、罰をお与えになります。彼らは、主の面前から退けられ、その栄光に輝く力から切り離されて、永遠の破滅という刑罰を受けるでしょう。かの日、主が来られるとき、主は御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべての信じる者たちの間でほめたたえられるのです。それは、あなたがたがわたしたちのもたらした証しを信じたからです。このことのためにも、いつもあなたがたのために祈っています。どうか、わたしたちの神が、あなたがたを招きにふさわしいものとしてくださり、また、その御力で、善を求めるあらゆる願いと信仰の働きを成就させてくださるように。それは、わたしたちの神と主イエス・キリストの恵みによって、わたしたちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主によって誉れを受けるようになるためです」(テサロニケの信徒への手紙二1・3～12)

これが前置きです。

「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストが来られることと、そのみもとにわたしたちが集められることについてお願いしたい。霊や言葉によって、あるいは、わたしたちから書き送られたという手紙によって、主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動揺して分別を無くしたり、慌てふためいたりしないでほしい」(テサロニケの信徒への手紙二2・1～2)



霊や言葉によって、「主の日は既に来てしまった」、「自分は再臨のキリストである」と言う教祖がいるとしても、そんなものに動揺しないで欲しい。

「だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならぬからです。この者は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、傲慢にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです」(テサロニケの信徒への手紙2・3〜4)

これなのです。『自分こそは神である』とそう宣言する人が出て来ると、出てこざるを得ないがあります。

「まだわたしがあなたがたのもとにいたとき、これらのことを繰り返し語っていたのを思い出しませんか。今、彼を抑えているものがあることは、あなたがたも知っているとおります」(テサロニケの信徒への手紙2・5〜6)

パウロの言葉によると、そういう傲慢無礼な者はある時期までは止められているのです。しかし、それが外されるときが来る。そのときはひどいことになる。黙示録もそうですね。黙示録を見ていましたら、神の許しというのか、封印を解くという形でこんな現象が現れたと、次々と恐ろしいことが書かれていましたね。例えば、黙示録第6章7節に第4の封印を解いた、そうしたら、青ざめた馬があつてこれに乗る者の名は死という、陰府はこれに従った。

「彼らは、地の四分の一を支配し、剣と飢饉と死と地の獣とをもて人を殺す

ことを許されたり」(黙示録6・8)

と。こんなものを見ますと、今の偽教祖の姿を二重写しにしてしまうような感じがするのです。また、第8章7節には、

「第一の天使がラッパを吹くと血の混じった雹と火があつて、地に降つて来て、地上の三分の一が焼けた。樹の三分の一が焼け失せ、もろもろの青草が焼け失せた。第二の天使がラッパを吹いた。すると、火で燃えている大きな山のようなのが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、また、海に住む生き物の三分の一は死に、船の三分の一が壊された」(黙示録8・7〜9)

と。そういういろんな変な自然界の天変地異みたいなことが書かれていますね。そういうものは全部いわば暗号みたいなものですから、何年何月にどうのこうのとかは言えないですけれども、何か終わりの世にそういう非常に今まで体験しなかった変なことや忌まわしいことが起こり得るということが予言されています。それを我々は知っておいていいのではないかと思います。

テサロニケ書簡に戻りますと、



「それは、定められた時に彼が現れるためなのです。
不遜な己を神とする変な力が現れるためである。」

不法の秘密の力は既に働いています。ただそれは、今のところ抑えている者が、取り除かれるまでのことです。その時が来ると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御自分の口から吐く息で殺し、来られるときの御姿の輝かしい光で滅ぼしてしまわれます。不法の者は、サタンの働きによって現れ、あらゆる偽りの奇跡としるしと不思議な業とを行い、そして、あらゆる不義を用いて、滅びていく人々を欺くのです。彼らが滅びるのは、自分たちの救いとなる真理を愛そうとしなかったからです。それで、神は彼らに惑わす力を送られ、その人たちは偽りを信じるようになります。

まるで、神様が許しておられるような書き方をしていますね。

こうして、真理を信じないで不義を喜んでいた者は皆、裁かれるのです」(テサロニケの信徒への手紙二・6～12)

直接当てはめることはできないにしても、こんなふうによりなる者が、如何にも本当であるかのような装いをしたり、ここにありますがように、

「あらゆる偽りの奇跡としるしと不思議な業とを行う」

ということまで、ちゃんと言われています。だから、いよいよ、本当に我々は主イエス・キリスト、特にパウロによって伝えられてきたキリストの御姿、霊なるキリストの御姿、そこにいつも立ち返る。日常生活の在り方としては、パウロが勧めているところを信じて委ねていく。私はもうそれだと思のです。福音書では、キリストはあまり日常生活のことと細かに言っつてらっしゃらない。でも、パウロは末の世における我々の生き方というものをちゃんと示してくれています。そのパウロはキリストに召された方です。主キリストはパウロに、

「お前は私の名を持ち運ぶ選びの器だ。私のためにどんなに苦しいめに会うかも知れないけれども、最後までやつて欲しい」

と言って、福音の宣教をキリストはパウロに託されました。パウロ書簡の中に現れていることは極めて内容は地味であります。地味でありますけれども、私たちは、そこに本当の姿があるということを確証して進んでいこうと思う訳であります。それでは、これで終わりとしまして、ご一緒に祈ります。

●資料

「ともしび第24号」(四国キリスト召団日より 発行1988年6月26日)

主に在る兄弟姉妹

主に愛され 抱かれなば 捨身の愛 われにみつる



主に在りて 力あり 主のみ霊こそ 原始力ぞ！
新天地の 望みに生く 主の光を 四方に放つ
主に在りて 力あり 主のみ霊こそ 原始力ぞ！

（召団讃歌A20「信じ入れば」2～3節）

京都で小野逸次兄召天記念集会のもたれた、5月29日（日）の午後、市川詩子姉と共に快晴の屋島に登ってみた。昨年の合同ペンテコステ集会以来一年振りのことだった。会場となった桃太郎旅館、小野兄姉の泊まられたお部屋、旅館の前の展望台、そこから眼下に見渡せる瀬戸内海、今年も、その海は波静かにキラキラと輝いていた。

雑踏の南嶺を離れ、北嶺への道を辿ると、もう昨年と変わらぬ静寂の道である。小野兄を車にお乗せして千間堂の祈り場を往復した小径である。樹々の緑が祈り場へと導く、ウバメガシの緑道、緑の芝、木漏れ日、鶯の囀り、春蟬の声、池のオタマジャクシ、それに紅蓮の花。この天与の祈り場は導かれた兄弟姉妹と共にあるたたずまいであることを、再訪により初めて知らされた

「なんじらは喜びて出きたり、平穩にみちびかれゆくべし。山と岡とは声をはなちて御前にうたい、野にある樹はみな手をうたん」（イザヤ書55・12）

昨年は兄弟姉妹の皆さんに、実際に当地を見ていただき、しかも集会場にまでお越しいただき、集会を共にできましたのも、何にも代え難い恵みでした。この集会場もまた祈りの家として出発できたからです。

「神の国は見ゆべき状にて来らず。視よ、神の国は汝らの中に在るなり」（ルカ伝17・20～21）

普段は相離れて集会を共にしているせいでしょうか、小野兄の召天の報に接し、真つ先に上記聖句が浮かんできました。しかも

「視よ、主に在る兄弟姉妹は汝の中に既に在るなり」

と響いてきました。嬉しいことでした。知らず知らずのうちに、魂の奥深くにすっかり兄はお住まいでありました。そして、主に在る兄弟姉妹はお互いの内に生まれ合って、荷な

い荷なわれる。

「それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また人の欲にもよらず、ただ神によって生まれたのである」（ヨハネ伝1・13）

小野兄を喜びをもつて天に送られた京都の兄弟姉妹の皆さんの讃歌は、地上の旅路を完走された、小野兄を観て下さい、と合唱しておられる。そして、天地万物を包み、我等の主さまがおっしゃっている。

「されど、今日も明日も次の日も我は進み往くべし」（ルカ伝13・33）



●「荒野の泉」

カウマン夫人著、山崎亭治訳

1月7日

「わたしはありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ている」（ピリピ書4・11）

すべての慰めを断たれたパウロは、牢獄ろうごくでこの言葉を記録した。こんな話がある、一人の王がある朝、自分の庭園にはいつて、どの草も元気をなくして死にかけているのを見出した。彼は門の入口に立っていた、ならの木にそのわけをたずねた。ならの木はこれに答えて自分は松の木のように背が高くのびないばかりか、立派でないから生きているのがいやになったと答えた。又松の木は松の木で、ぶどうの木のように実を結ぶことができないから全く生きがいがなくなったと答えた。又ぶどうの木は、桃の木のようにひとりで直立して、見事な実を結ぶことができないからやけくそになったといった。又ゼラニウムはライラックのように背が高く又香り高くならないからと言ってすねていた。そして庭中がこんな有様であった。王は最後に三色すみれの所に来たが、その輝いた顔はいつものように嬉うれそうであった。

「ヤア、三色すみれ、誰も皆がっかりしているのに、この勇敢な小さい花を見出したのはうれしい。君は少しも失望してはいないようだ」

「ハイ、私は取るに足らないものですけれど、こう考えています。もし、あなたがならや、松の木や、桃や、ライラックがほしければそれを植えたでしょう。しかし、あなたは三色すみれをほしくて、わたしを植えて下されたと思いますから、わたしは最上のすみれになる決意しております」

と答えた。

他の人たちは更に大きな働きをしよう

けれども君は君のなすべき分を持っている。

そして神の民たちの中に

君の仕事は君のようによくできる者はいない。

神の民は例外なしに、どんな状態にいても満足している。それは、彼らは神のみ旨むねを自分の心とし、何事でも神が彼らにさせようと願っている事をしようと、思っているからである。彼らはあらゆる物を脱ぎすてて、はだかの有様ですべての物が百倍にして報いられることを見出すのである。

〔奥田昌道先生講筵8「神の奥義なるキリスト」1998年12月23日京都キリスト召団発行より転載〕

